八丈島歴史散歩　　平松健　東京古田会ニュース１０７号(２００６年３月掲載分)
２００６年2月１２日～１４日

東京古田会主催の八丈島歴史散歩には藤沢会長を始め１１人の参加で誠にまとまりの良い旅行だった。鳥も通わぬ八丈島といわれながらジェット機で４５分、途中乱気流に見舞われながら、ほぼ予定通り空港には到着。ところが八丈島到着直後からアクシデント、現地のボランティアガイドをしてくれる予定の方が、前日に交通事故で入院、交替の人繰りがつかず、とりあえず高木さんがピッチヒッターで運転手兼ガイドを勤めるという早業。

まず訪問したのが**宇喜多秀家の墓**。

東里外、稲葉墓地にひっそりと立っている。戒名が立派なのに比べ墓石はまさに流人を思わせる粗末なもの、その上そばに小さい墓が並んでいるのが印象的だった。たぶん現地妻なのだろう。高木説では宇喜多家は百済の出とのことで、帰って姓氏家系大辞典を見ると、「上世百済王子三兄弟船を泛べて備中児島に至る」とある。児島高徳もこの系統。秀家は母お福の美貌から秀吉の養子となり、五大老の一人にまでなった。関ヶ原の合戦で破れ、徳川の臣下の礼を取れば大名として残れたが、それに応じなかったため、主従十三人で八丈島流罪の第一号となった。前田家から来た奥方の豪姫は八丈島への同行は許されず、代わりに一年おきに白米七十俵、金子三十五両など送ることが許されたといわれる。

八丈島歴史民俗資料館、ここでやっとガイドさんが来る。

八丈島の名前として、由来は江戸末期の流人近藤富蔵によれば八の字の嶽（丈）から来たというが、鉢を裏返した形、鉢状からきたのではないかという、東北古田会の菊池説がいっそう説得力がある。八丈島の人はどこから来たかについては、八十八重姫（優婆夷姫伝説）、徐福伝説、丹那婆伝説があるが、島のあちこちに出雲伝説の名残を残しているのは、興味深い。考古学的には、土器、石器などの特徴はほぼ同年代に比定される縄文時代前期の様相とは著しく異なっている事から、縄文文化とは直接の関係はなく、より、南方諸島、黒潮の流れる流域からの渡来である可能性が強いという説が有力である一方、神津島の黒曜石が出土することから、縄文文化との関係は深いと見る説、あるいは一旦伊豆諸島に定着してそれが再波及したという説などがある。言語学的には言葉が類似しているものが極めて少ない（八丈島の方言辞典）ことや、椿説弓張月には爲朝と言葉が通じない場面が出てくるところなどからみて、関東の一定地域からの移住というのは無理があるような気がする。

爲朝神社

その昔源爲朝が八丈に来てみたら、島には女しか住んでいなかったといわれる。男女同居すると海神のたたりがあると信じ、男は青ヶ島、女は八丈島にすんでいるのだという。爲朝は島の娘を嫁として子を産ませ男女同居することの喜びを教えたとある。椿説弓張月後編巻之一には双子を生んだので太郎丸次郎丸と名づけて幸せに暮らしたので海神の祟りは空

言だとして同居するようになったという。ただ爲朝は、島民が喜んだのに安心して、従者とともに男の島に帰って行った。ここでは男の島は青ヶ島（八丈島の南）としている、爲朝神社の本体は八丈小島（八丈島の西）の方にある。ちなみに爲朝が流されたのは伊豆大島で、死亡したのも伊豆大島とされているが、八丈島の人は、爲朝が死亡したのは八丈小島という。もっとも弓張月では爲朝は琉球にいっている。義経伝説と同様に不遇の英雄は各地に伝説を残すのであろう。面白いのは弓張月にも男女別々にするのは徐福によるもので、呉織、漢織も徐福と共に来たとしている。近藤富蔵の著した八丈実記によれば、馬琴が弓張月を書くときに八丈島の寺の人に資料を求めて送ったとあるが時代考証では馬琴の方が古くなる。八丈実記には後漢書の一文や海東諸国記の一文を挙げ挙げているが、八丈島に直接結びつくものではない（日本における徐福の伝承＝山本紀綱）。八丈島出身の式亭三馬から知識をえていることから、むしろ馬琴が徐福伝説を作ったようにさえ見える。

優婆夷（うばい）宝明神社

事代主命のお妃優婆夷姫とその子の古宝丸が祀られている。この二柱は八丈島民の先祖であるとされ、神社創建は古く、延喜式神名帳に記されている式内社である。境内には織部灯籠や樹齢千年と言われる大蘇鉄などがある。

湯浜遺跡

八丈温泉ホテルで温室を作るために整地工事を行った際に大型の磨製石器が採集され、その後三度の調査で二軒の竪穴住居跡が発掘された。時代的には７千年前とされ、近接する倉輪遺跡（縄文時代前期末から中期初頭）の下層に位置し、南方諸島あるいは黒潮の流れる流域からの伝来を思わせる。しかし神津島産の黒曜石が石器に利用されていることなどから伊豆諸島や本土とも密接な関連があったと思われる。現在はこのホテルは倒産していて立ち入り禁止となっている。出土品の地層が分かるようにガラスで保護しているのを懐中電灯で照らしながら見る。なお人骨も男女二体出土。現代人とのＤＮＡ比較鑑定はしていないようだ。いずれにせよその後二千年から千二百年前の間に現代人と先住民との断絶があったとされている。

島酒

丹宗庄右衛門がながされて来たとき、島では穀物から酒を造ると飢饉を招く心配があるので禁酒令が敷かれていた。そこで彼は穀物でない薩摩芋から作る故郷の焼酎製造法を伝えたので酒に飢えていた島民からは大変感謝された。以前は六軒の焼酎製造元があったが現在は倒産して数件になっているという。

露出地層

大島や三宅島と同じ玄武岩の火山島である八丈島は流動性に富む溶岩を流出し、スコリ

ア（黒色や赤紫色の火山礫）を放出する噴火を繰り返してきた。しかし、西山（八丈富士）が誕生する遙か以前の、いまから二万五千年前頃、東山（三原山）では玄武岩とは全く性質が異なるディサイトマグマが活動し大量の軽石放出する激しい噴火が続いた。現在断層になっているところでそのころ噴火で降り積もった「末吉降下軽石」の層が見える。興味深いのはその中に五センチほどの火山灰があり、姶良（あいら）カルデラ（鹿児島湾北部）を形成した巨大噴火の際の姶良Ｔｎ火山灰であることである。
新世紀最大の鬼界カルデラの巨大噴火（約七千から六千五百年前）は南九州地域を瞬時Ｂに厚い火山灰（アカホヤ火山灰）で覆ったといわれるが、ここにある断層からはそのときの火山灰の確認はできない。むしろそのとき八丈島にも人が渡ったのかも知れない（小田静夫説）

注　姶良 Tn 火山灰（あいらてぃーえぬかざんばい）は、約 2 万 9 千年前～2 万 6 千年前に姶良カルデラの巨大噴火で噴出した大量の火山灰である。（以前は約 2 万 5000 年前～2 万年と考えられていた。）Tn は丹沢を示す。この大噴火で噴出した火砕流が陸上を流れて堆積したものが入戸火砕流で、「シラス」の通称でよく知られている。同時に噴出した火山灰のうち、空中高く吹き上げられ、偏西風に乗って東方へ飛んでから地上に降下したものが姶良 Tn 火山灰（AT）となった。

黄八丈
昔ながらの方法で天然の繭を用い、草木染めで黄八丈を作る。江戸時代には現物年貢として珍重された。すべて手織り。最高級品は九百万円もするものもある。

流人
流人の島といわれる八丈島には約２７０年の間に１８９８人が流された。最初は宇喜多秀家以下、身分のあるもの、政治犯など尊敬できるものであったが１６８０年頃からは火付け、強盗など悪質犯も送られるようになる。しかし島民は流人を差別せず、飯炊き女などとして、実質上の結婚も認められ、ご赦免の時は妻を残し、子を残して帰って行った。
島に残る人たちの離れがたい気持ちは、今も昔も変わらないようである。我々が二日目の全日程を終えて、飛行場でチェックインしたあとで、世話になった方々と別れがたいかのように飛行機が整備不可能となってしまった。おかげで思い出をもう一晩八丈島に残して、一同去りがたい気持ちで１泊２日が２泊３日となって歴史探索の旅を終えた。